

《書評》

廣石 望 著

『新約聖書のイエス 福音書を読む 上』

『新約聖書のイエス 福音書を読む 下』

NHK 出版、2019 年

藤方 玲衣

FUJIKATA Rei

本書は、NHK ラジオ「宗教の時間」（ラジオ第2放送、第2日曜日午前8:30～9:00放送）の2019年度シリーズ「新約聖書のイエス 福音書を読む」のガイドブックとして出版された。『上』は上半期（2019年4～9月）、『下』は下半期（2019年10月～2020年3月）の内容を収録している。

（本書で考察された、生前のイエスや原始キリスト教の：評者註）歴史的な再構成があるていど正しいとして、残されている大きな問いがあります。それは、現代の私たちがそうした宗教的遺産をどのように受け止め、また未来に向けて用いるかというものです。この問いには、まずはキリスト教徒自身が答えるべきでしょうが、その対話相手はより広い範囲の人々であることが望ましいと思います。（下巻「おわりに」、190頁）

以上のように結ばれた本書は、「より広い範囲の人々」の手元に届きやすいかたちで、社会へと旅立った。比較的小規模の書店にもNHKラジオ関連書籍の棚が設けられていることは多く、新刊が面陳されているのもよく目にする。ふらりと書店を冷やかすひとの眼にとまる機会もあるだろう。

本書を開く読者がまず触れるだろう「はじめに」では、『新約聖書』のあらましから、宗教の一般的な二つの機能（統合的機能／対抗的機能）の解説があり、イエスと原始キリスト教にはいずれにおいても創造的機能が明瞭で

あることが導入として述べられる。そして、本書の大目標として、イエスにみられる現状改革への志向と、原始キリスト教が持っていた新たな文化状況への統合への姿勢とに、批判精神と好意とをもって相対することによって、現代社会に資する使信の獲得ということが提示される。続いて、史実と伝説の二つの伝承の存在に注目しつつ、イエス研究と原始キリスト教研究の基礎的知見を総合して歴史的なイエスを再構成し、そのイエスが「キリスト」として信仰されるに至った過程を素描するという、本書の考察の方法論が解説される。イエスは初期ユダヤ教の神話的世界観と、独自の神理解とを織り合わせた運動を展開したこと、原始キリスト教は、復活のイエス信仰に基づき、神話的雰囲気を加え、神と世界の新解釈の流儀を産出したという、結論の簡明なまとめの後、叙述の道筋が案内される。導入は、『聖書』の構成と、イエスの実在性について。序盤と終盤は、「福音」概念の変遷や多様性、イエス誕生物語の成立、救済論の多様な発展（＝原始キリスト教が、イエスをどのような存在として理解し提示したか）。中盤は、史上のイエスにまつわる重要主題（「神の王国」、奇跡、たとえば、共同の食事等＝イエスが、神と自分自身をどう理解し表現したか）。これらの段階を踏み、「イエスと原始キリスト教の間にある連続と非連続を含む、多様な影響ないし再解釈の関係」（上巻、4頁）を考察することが目的であると読者を懇切に手引きする。

この「はじめに」の数頁からだけでも、学問的精緻さとキリスト教信仰の立場、そして「より広い範囲の人々」へむけた平易さという、一見共存し難く思われる要素を、誠実に共存させようという著者の真摯な態度が伝わる。この態度が、本書を貫いている。『聖書』が学問の対象となりうると知った驚きから聖書研究を志し、その歩みのなかで「キリスト教信仰が、自らを超える神への信頼にもとづいて、自分を含む人間や社会に対する批判的かつ創造的な関わりを促すものであることにしだいに目を開かれて」（上巻、5頁）いったという著者の手になる本書は、媒体の性質、叙述の姿勢が相俟って、多様な人々に届きうるものとなっている。

本書には、全12回の内容が収録されている（上下巻それぞれ6回分）。広範に及ぶ論題のいずれにおいても、丁寧に考察、解説されるのは、イエス

及び原始キリスト教と社会とのかかわり（対話や葛藤）である。著者は、各テーマと生きた社会との関係性を考察することで、その内容を描き出そうとする。

（上）

第一回 「イエス」は実在の人物か

『聖書』という書物のあらましと「キリスト教」の概略。及び『新約聖書』の「福音書」の主人公イエスの歴史的事実の蓋然性についての、キリスト教内外の記録からの検証。相互に独立する資料間の符合などから、イエス実在の蓋然性は高いと結論づける。

第二回 「福音」と「福音書」の間

『新約聖書』における「福音」概念の多様性、キリスト教の枠外、ローマ皇帝との関連での「福音」という言葉の使用例、文学類型としての「福音書」とヘレニズム世界の伝記文学との比較。いずれの「福音書」も、復活信仰の視点からイエスの生と死を記述していることを提示。

第三回 イエスの誕生

イエスの誕生譚は、通常の間人と同様だとする古い伝承から、処女降誕、マリアの神話化と拡大する。この変遷は、偉人や皇帝の誕生譚や神話との関係において生じたものであり、異なる文化的背景を持つ人々の共存の模索の結果であると説明する。

第四回 イエスのカリスマ

イエスのカリスマが社会関係の中で発揮されたことを、周囲の人々との関係性から考察する。イエスは、親族からは「脱落者」とされたが、ヨハネからのカリスマの継承や「神の家族」という対抗理念の提唱、独特の生活形式により、人々を魅了した。一方、伝統的権威の擁護者からは逸脱者として敵視されることとなった。

第五回 イエスの「神の王国」

イエスの宣教の焦点である「神の王国」の特徴について、ユダヤ教的背景を勘案し考察する。イエスの「神の王国」は、慈愛で横溢した父的な神が支配する新時代であり、その働きは既に歴史、人々の只中に及ぶ。イエスの行

為はその到来の体現であった。既存の社会秩序への挑戦となる形で催されたイエスの「交わりの食卓」は、来るべき「神の王国」の先取であった。

第六回 イエスの奇跡

古代の奇跡物語の考察から、当時の文化的常識として流布していた奇跡物語の構成を提示した上で、イエスの奇跡の特徴と分類を整理する。福音書収録までにそれらの物語が被ったと考えられる変形や再解釈についても個々に考察する。

(下)

第七回 イエスのたとえ

「たとえ」を用いた「神の王国」の主題化は、イエスにおける特異な現象である。イエスの「たとえ」の特徴を文学類型的視点から定義した上で、ここでは比喩部分そのものが命題であるという隠喩論的見解が示される。イエスは、「たとえ」を用いて、変貌しつつある世界と人間の関係を表現した。「神の王国」とは、世界と人間の関係の伝統的図式を変換する意味論的規則の謂いである。

第八回 「神の王国」の倫理

一神教（神中心性）と契約遵法主義（人間中心性）というユダヤ教の二つの根本公理を踏まえ、ユダヤ教倫理の源泉（「律法」、「知恵」、「終末論」）とイエスの「神の王国」との関連を探る。イエスにとって「神の王国」は、「律法」の彼方に神の意志とともにあり、「知恵」に代わる世界解明の鍵であり、それが到来する未来は現在に統合され、「終末」と現在の間隔はない。

第九回 イエスの「交わりの食卓」と最後の晩餐

イエスの「交わりの食卓」の特徴を、古代の食事式慣習との比較から考察する。社会的序列を厳守し、女性参加の余地はない同時代の慣習に対し、イエスの「神の王国」の先取としての食卓では、神の主導権と人間の無力さに対する認識のもと、社会的価値が逆転する。「最後の晩餐」は、イエスによって、「神の王国」到来に先立つ最後の前夜祭として演出されたものだった。

第十回 イエスの「死」

イエスの受難物語は、裁判記録ではなく、後代の聖伝である。その背景には、各々の福音書著者のキリスト理解、ユダヤ教やローマ帝国への態度がある。その特性を、旧約聖書の苦難観、殉教観との比較から検証。イエス及び弟子たちは弱々しく描かれ、キリスト教に独自の受難するメシアという表象が形成されたと考察。イエスへの信従は、己の弱さの承認でもあることになる。

第十一回 イエスの復活

復活信仰の形成について、旧約聖書とユダヤ教の歴史の中で形成された文化史的背景を考慮しつつ考察。前提には、ユダヤ教における信仰、イエス自身の言及という前提があるが、イエス自身の復活は予期されなかった。復活告白は、イエスの死と顕現という衝撃的な二つの経験の関連を説明するための創造的仮説推論として導き出されたと考察。復活のイエスは、世界を新たに規定する存在としてキリスト教信仰のあらゆる源泉となる。

第十二回 イエスの「救いをもたらす死」

イエスの全存在を神の救済計画との関連で理解した原始キリスト教は、その死を、当時のあらゆる社会領域に由来する多様なモデルを援用しつつ、「救いをもたらす死」として発信した。イエスが「神の命」をなお生き、それを私たちに媒介するというキリスト理解は、イエスの死を消極的な「犠牲」に帰結させない。原始キリスト教の「私たちのための死」との表現には、非常に積極的な意味があると著者は言う。

評者は、大学院に在籍しつつ、高校生にキリスト教史を教えている。カリキュラムの最初は、キリスト教の源泉としてのイエスの思想、行動、死であり、続いて原始キリスト教における「復活」信仰の成立や組織の発展などを概説する。それは、二年かけて現代史に至る授業内容のほんの数回に過ぎない。イエスの行動に端を発したキリスト教は、そののちこそ長い歩み続ける。評者は、現在の社会の只中に存在するキリスト教は歴史の作品である、と生徒たちに話すことにしている。あらゆる状況、場所、立場にあって思考

し、行動した無数の人々が遺したものの集積物が、今私たちにかかわるキリスト教である。それは、遙かな古代よりの流れが、イエスを経由し、様々なものと対話し葛藤しつつ現在に続く運動ではないか……と、評者はたどたどしく語っている。

本書は、イエスと草創期キリスト教が繰り広げた、社会と歴史との切実な格闘の姿を、資料と方法論を組み合わせることで堅実に描出している。イエスもキリスト教信仰も、しがらみ無く浮遊している存在ではない。関係性の中で芽生え、成長していったのだと、著者は、堅固な裏付けによって読者に示す。傍証例証と方法論を地道に積み上げる本書の記述は、多くの読者に、聖書学の凛々しい姿をも伝えるに違いない。

「おわりに」で著者が示唆するように、あらゆる人が、『新約聖書』が伝える宗教的遺産を継ぎ、この社会のなかで創造的に用いることができる。その創造的行為への道案内、手引きとなるのが、本書である。イエスの使信、原始キリスト教の人々の信仰を包み込み、歴史と社会の只中で生み出された『新約聖書』を紐解くなら、他者や社会と対話し葛藤した人間たちが、なお生きて語り掛ける。私たちもきっと、未来にとって素敵な遺産になることができるはずだという信頼が、本書の通奏低音となっている。

(本学大学院キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程後期課程)